

隠喩としてのラシャ張りのドア —— グレアム・グリーンの「国境」

The Green Baize Door as a Metaphor: Graham Greene's Border Between Two Worlds

岩 崎 正 也*
Masaya Iwasaki

本稿は1993年6月6日から一週間、ロンドンの27マイル北西にある、グレアム・グリーンの母校パーカムステッド・スクールを取材したときの調査をもとに、「緑色のラシャ張りのドア」についての現実と虚構の関係を検証したものである。

1

グレアム・グリーン(1904—91)は人間の生と死との係わりを描くために、異なる二種の領域を隔てる隠喩としての「国境」をくり返し表現してきた。たとえば、『第三の男』(*The Third Man*, 1950)では、ハリーが二度埋葬される奇怪な事件の始めと終りの舞台となる墓地が、ロロ・マーティンズの生から死、死から再生という両世界を分ける境界として描かれる。小説世界の構造が作者の現実認識の論理に支えられているとすれば、「国境」のモチーフの原型が、六歳のときにグリーン一家が移り住んだスクール・ハウスの中の私邸と校舎の境目にある緑色のラシャ張りのドアであり、そのドアが作者の現実体験と虚構の関係を解く鍵であると筆者は考えてきた。グリーンが自伝の冒頭で、「このパーカムステッドに最初の原型があり、そこからものごとが無限に再生されることになった¹⁾」と記しているからである。小説作品を除き、グリーンがエッセイの中でラシャ張りのドアについて書いた文章は二つある。一つは『掟なき道』(*The Lawless Roads*, 1939)のプロローグの中に自伝的回想として示される。

父の書斎の脇の廊下にある緑色のラシャ張りのドアを開けると、紛らわしいほどよく似た別の廊下に出る。それにもかかわらず、そこは異国の土地なのだ。寮母の部屋からヨードチンキの、更衣室から蒸したオルの、あちらこちらからインクのかすかな匂いがしていた。再びドアを背にして閉めると、世界は違った匂いがした。書物と果物とオーデコロン匂いの。私は両方の国の住人だった。土曜と日曜の午後にはラシャ張りのドアの片方の住人であり、平日はもう一方の住人だった。国境の上で暮していると不安でないということがあるだろうか。憎しみと愛という異なる絆によって引き裂かれるのだ。というのは憎しみはまったく同じように強い絆である。それは忠誠心を強要する²⁾。

この文章は、「十三歳のころだったと思う」と書き出されたプロローグの一部だが、学校と家庭の境界であるドアをくぐるたびに、グリーンの意識の上に起きた心象風景であるかのように、家庭にたいしては愛情を、学校にたいしては烈しい呪咀の気持をこめて語られる。つまり現実の自宅からドア一枚を隔てて校舎に通じる見取図を描いていると見せながら、じつは自我の分裂に悩まされた現実の体験を比喩的に伝えている点で、作者の心象風景を表している。だから現実のモノとしてあるはずの「緑色のラシャ張りのドア」は、ここでは二つの世界の国境のシンボルとして使われて

*教授

いる、と読むのが妥当ではないのか。けれども、もしかしたらこの文章には間取りがそのまま記述されている可能性もあるので、筆者はどちらか一方と断定することはできなかった。

この心象風景はどう読み解いたらいいか。問題は二つある。一つは、この記述が間取りをそのまま写しているか、二つ目は作者が六歳から十三歳になるまでスクール・ハウスの中で暮っていた七年という現実の時間をどのように虚構化したかということだが、しかしこの二つは切り離して考えることはできない。もう一つのドアの記述は、『自伝』(*A Sort of Life*, 1971) 中にある。

校舎は父の書斎の向うにある緑色のランシャ張りのドアを通り過ぎたところから始まる。廊下は休日には私たちが遊ぶことができる古いホールに通じ、もう一方の廊下は寮母の部屋とテラスへと続いていた³⁾。

これは、六十七歳になって、「憎しみと愛という異なる絆によって引き裂かれ」ていた自我の分裂をすでに克服した作者の冷静な理性により、なんの感情も交えずに記されているにすぎない。一方、六歳下のヒュー・グリーン⁴⁾の伝記の中では作者のマイケル・トレーシーはランシャ張りのドアについて次のように書いている。

スクール・ハウス自体は二つの区画に分れていた。私邸側ではヒューや兄弟姉妹が両親と暮らしていて、両親の愛情がどちらかといえば遠まわしで、ときどきサディスティックになるメイドがいたにもかかわらず、少しは満足を味わうことができた。一階のチャールズ・グリーン⁵⁾の書斎を越えて、狭くて天井が低く暗い石の廊下の端にある緑のランシャ張りのドアは両方の世界を隔てる国境地帯であった。ヒューはドアの私邸側にいるときはほぼ安心していられたが、そこを通過するといつも、その気分がすり抜けて嫌悪を感じたり憂鬱になったりした⁶⁾。

第三者によるドアの位置関係についての客観的なこの記述は、『自伝』にあるグリーン⁷⁾の表現に近い。だがこの中の「ヒュー」を「グレアム」に

置き換えれば、そこに『掟なき道』のドアについての記述を想わせる、グリーン⁸⁾の幼年を形成する愛と憎しみの世界が現れる。

グリーン⁹⁾の伝記を第二巻まで書き終えたノーマン・シェリーはスクール・ハウスの中のドアの位置には触れていないが、「緑色のランシャ張りのドアは天国と地獄の境界線、つまりエデンの園と未開の世界とを隔てる門戸となるはずだった⁵⁾」と、ドアのイメージが二種の世界の「国境」であることを指摘する。

2

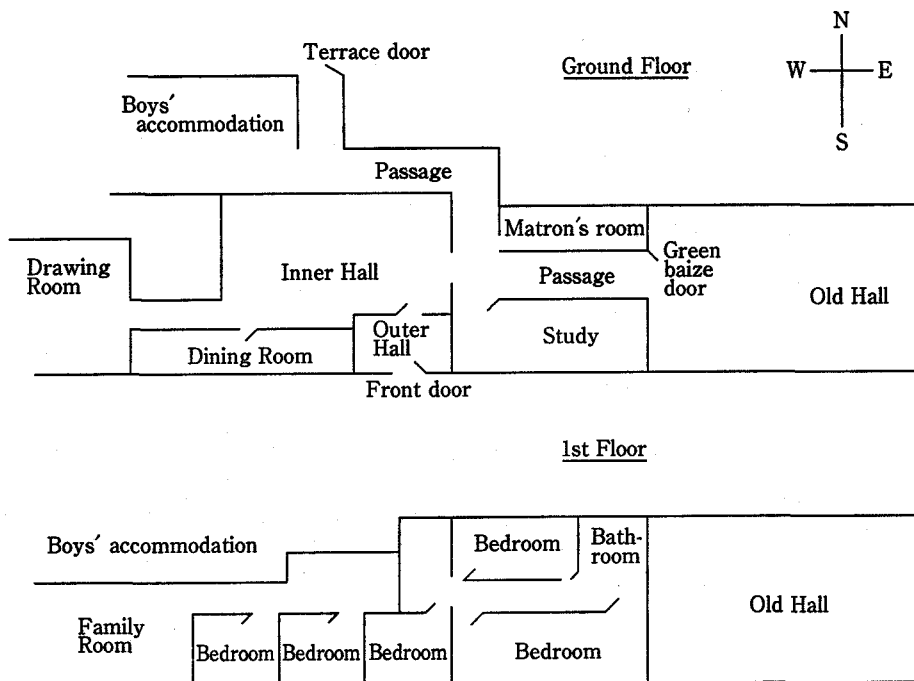
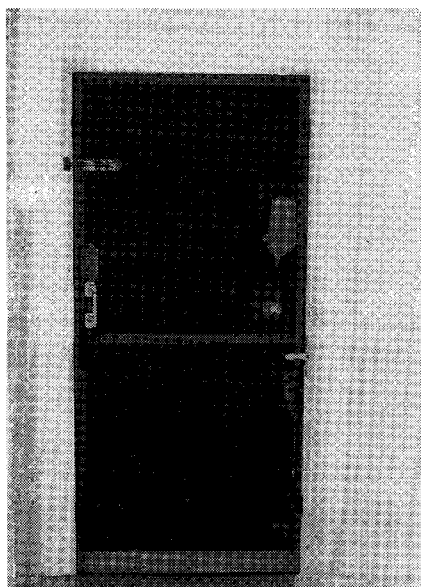
1993年6月、六日にわたりパーカムステッド・スクールを取材する許可を取り、筆者は初日に16世紀創立当初のスクール・ハウスに出かけた。ハウス・マスターのジョン・デイヴィスン氏に案内されて行くと、グリーン¹⁰⁾の父が使っていた書斎の脇の通路と講堂のひっそりとした境目に、骨董品のようにドアはあった。トレーシーが見て書いた当時の「暗い石の廊下」はすでに明るい色のリノリウムに改修されていたため、ランシャの一部が剝がれ落ち、木目が露われて黒ずんだ「緑色のランシャ張りのドア」は、近代的な内装を施された天井、側壁、床面の明るさとはまったく調和しないたたずまいを示していた。

3

帰国後、デイヴィスン氏から手書きのハウス内¹¹⁾の見取図といくつかの疑問にたいする回答を受け取った。

氏はこの図面の裏に、「これはグリーン¹²⁾が知っていたと思われる間取りだったと信じている図を描いたものだ」と記している。書斎とドアとホールの三者の位置関係を見ると、『自伝』ではグリーン¹³⁾は明らかに図のとおり¹⁴⁾に記述していることがわかる。その記述が実際の配置に合うかとの筆者の間に氏は、「私はグリーン¹⁵⁾が書斎のドアの外側にある、互いに直角に延びている二つの通路のことを言っていると考える。片方はテラスとかつての寮母室(今の台所)に達している¹⁶⁾」と回答の中で図との一致を肯定する。

一方、『掟なき道』のドアの記述は現実の配置とどう異なるのか。氏は、「グリーン¹⁷⁾の記述は現在の見取図に合わない。書斎のすぐ外の右手の所に別の緑色のランシャ張りのドアがあった可能性が


スクールハウス見取図⁶⁾ (デイヴィスン氏作成)


緑色のラシャ張りのドア (筆者撮影)

ある。けれども、私の考えからすると、これは妥当ではない。彼の記憶が間違っていたと思う。細部が家庭と学校とを隔てる象徴的な境界についての主要な点に影響を与えているわけではない⁸⁾と述べて、このドアの描写が境界の象徴を意図し

たものであり、現実の再現ではないことを指摘している。

4

ここで改めて『掟なき道』のドアの記述と見取図を比べると、記述が図面を表していないことは明らかだ。十三歳のグリーンが実際に感じていたのは自我の分裂の意識であり、分裂した忠誠心の葛藤であったはずだ。記述ではドアの向う側(図の右側)が異国であり、こちら側が家庭であるというように、ドアを境目にして生活空間は敵と味方に二分されている。しかし図面では向う側にオールド・ホールという校舎があるけれども、ヨードチンキの匂いが漂う寮母室はじつは一階のドアのこちら側にある。私邸は全体が家族の住む領域ではなく、学校運営の機能を果す公的な部屋がいくつもあった。シュリーは、『掟なき道』の「父の書斎の脇の廊下にある緑色のラシャ張りのドアを開けると、紛らわしいほどよく似た別の廊下に出る。それにもかかわらず、そこは異国の土地なのだ」という一部を引用したうえで、「異国の土地」は、「シベリウス交響曲の陰鬱な主旋律のようにくり返され、そのたびに強く演奏されること

になった。異国の土地についてグリーンはじょじょに体験を深めていった。異国の土地とは、以前彼が誕生日のケーキの一切れを贈物として携えて行った寮母の部屋も含まれるが、また古いホール、つまり初期の校舎や、彼と弟のヒューが大きなテーブルを寄せ合って、H. G. ウェルズの *Little Wars* にもとづく手のこんだ戦争ゲームをして遊んだ校内食堂や、彼が自由に手に取って読むことができた図書室もその範囲に含まれていた⁹⁾と述べて、グリーンを意識にある異国の例を四つ挙げているが、そのうちの食堂もまた図面の一階の私邸側にある。ほかに異国として寮生たちの住む部屋がスクール・ハウスの一、二階にあり、ハウスの外の校地内には礼拝をずる休みするようになったディーンズ・ホールがあり、さらに町のハイストリートの南側にはグリーンに「追われる」意識を刻みつけたセント・ジョン寮があった。また中段の「土曜と日曜の午後にはラシャ張りのドアの片方の住人であり、平日はもう一方の住人だった」という文章は、グリーンが十三歳のときにそれまでの自宅通学をやめて、シニア・スクールのセント・ジョン寮に寮生として入ったときからの体験を描いている。それまでとは異なり、寮生のグリーンは日曜ごとに寮を出て、自宅に戻るのにラシャ張りのドアを通る必要はなかった。ハイストリートを経て、キャッスル・ストリートへ左折し、セント・ピーターズ教会の裏手にある墓地と、赤煉瓦のチューダー式のホールとの間の低い位置にある小道を通してスクール・ハウスの玄関をくぐればよかったからである。このようにグリーン你的生活範囲がスクール・ハウスの中からセント・ジョン寮へと広がったために、日常の国境線は家の中のドアから屋外のクロッカーの芝生へと移動した。十六歳のグリーンが土曜の夕方、メンデルスゾーンを聞きながら、学校と家庭の両方から逃げだして、芝生の陰にひそみ、悲哀のまじった幸福感にひたっていたことを、三十五歳のグリーンはドアの記述の前後に記している。

セント・ジョン寮の不潔さと残酷さ——これがグリーンに知覚した悪の心象風景だが、『自伝』では次のように記される。

私は文明をあとにし、奇妙な慣習と説明のつ

かない残酷さのある未開の国に入りこんだのだ。そこでは私は異邦人であり、容疑者だった。不審な共犯者がいることが知れわたっている文字どおりの追われる生き物だった。父は校長ではないか。私は占領下にある国のクリスティングの息子のようなものだった¹⁰⁾。

校長である父と寮長を務める兄レイモンドに代表される体制側と、それに対抗するいとこのベンを含む生徒たちの反体制側の間にあって、グリーンを意識がそれぞれの体制にたいする忠誠心により二分されたという点で、グリーンに二重意識は『掟なき道』のドアの記述にある「それ（筆者注、憎しみを表す）は忠誠心を強要する」という描写の延長上にある。

たしかにグレムは校長の息子だが、レイモンドやヒューも同じセント・ジョンの寮生として過し、精神的な外傷を留めないで卒業したことを考えると、グリーンに自己表現は知覚と感覚の過剰な反応といつてよいだろう。グリーンはアランとの対談で、プライバシーのない寮生活について、「あれは『脅威』だった。いつもプライバシーが必要だったと思う。乱雑さ、孤独が少しもない状態——脅威だった¹¹⁾」と述べているが、グリーンを知る卒業生たちは一様に異なる印象を示す。サー・セシル・パロットは、順応性の欠如を指摘し、R. S. スタニエは、生徒たちがグリーンをからかった原因はそのおかしい発声の仕方であり、グリーンは集団競技に参加しなかったために、当然いじめられたと証言する。体制側にいるグリーンに敵はカーターとウィラーの二人組だった。カーターはグリーンに忠誠心を巧みに利用して、体制側を裏切るように働きかける。このように二重構造から成る生徒同士だけでなく、家族内での人間関係の中で、いとこのベンに存在がグリーンにたいし内なる敵の意識を形成することになった。「内なる敵」はドアの記述に見られる、私邸側にも異国があるという二重意識の延長上にあり、第一作の『内なる人』(*The Man Within*, 1929) のモチーフになる。

エディプス・コンプレックスにとり憑かれたアンドルーズは、いつもロマンティックな幻想の中に閉じこもっているため、日常の事件にたいして

は自己の意思にもとづいて行動することができない。事件が起きるたびに、その自我は分裂し、「感傷家」と「批評家」の二重意識が葛藤をくり返し、主人公の視点は両者の上を往復する。森の中の一軒家でエリザベスに出会うことにより、アンドルーズの意識が内省的な世界から現実へ引き戻されて、「追われる」から「追う」位相へ転換するときに、物語は始めて二重意識に頼らず、両者を統合する意識から語られる。アンドルーズはエリザベスの死を見て、自らの意思により自己の中の「内なる敵」である父に復讐するために自殺を図る。

『ヒューマン・ファクター』(*The Human Factor*, 1978)の中で、息子から国境とはなにかと尋ねられたキャッスルは、「こちらの国が終って、あちらの国が始まる場所だ¹²⁾」と答えて、国境が地理上の境界であることを教える。グリーンにとって国境の原初のシンボルであった緑色のランシャ張りのドアは、『内なる人』では森の中の一軒家として再生され、「地下室」('The Basement Room', 1936)ではフィリップ少年の住む大邸宅の、子ども部屋を含む一、二階の自宅側と、執事夫婦の住む地下室との間にある文字通りの緑色のランシャ張りのドアとして再現される。しかしここではドアはただ地理的、空間上の境目であるだけでなく、子どもの時間と大人の時間を分ける境界でもあるという両義性をもつと考えられる。そのドアを挟んで、子ども部屋と大人の部屋という二種の空間が、原始と文明の異なる世界が対峙し、少年がドアを通過するたびに、生と死を往復するからである。

また「庭の下」(*Under the Garden*, 1963)は不治の病に冒された男が、幼年時代に見た宝探しの夢を回想によって再現する物語だが、その地下の世界をアンドルーズやフィリップの「死」の延長上におけば、これは死を覚悟した男が夢を再現することによって幼年時代を見つけ、「子」を再び生きることによって、成熟の鍵を探りあて、「生」に希望を抱く物語である、と言い換えることができる。この意味で地下洞窟は地理上だけでなく、時間上の境界の隠喩として示される。さらに隠喩としての「ドア」は、「橋の向う側」('Across the Bridge', 1938)ではリオ・グランデに架か

る文字どおりの国境の橋として、『拳銃売ります』(*A Gun for Sale*, 1936)では貨車置場の隅の小屋として、『ブライトン・ロック』(*Brighton Rock*, 1936)では車のガレージとして無限に変容をとげる。

5

「父の書斎の脇の廊下にある緑色のランシャ張りのドアを開けると、紛らわしいほどよく似た別の廊下に出る」という国境の風景を理解するのに鏡のイメージをもち出してみよう。人はある距離をおいて鏡を見ると、すぐその中の映像によって見られていることを意識する。そのとき、「私」である向う側の映像はこちら側の主体から独立した他者に変容する。つまり鏡をたんに生理的に「見る」という最初の行為が、自己が対象によって見られていることを知るというように変るとき、「見る」意味も変る。「見る」主体と「見られる」対象とが限りなく接近するだけでなく、「見る」行為と「見られる」行為がほとんど等しくなり、しかも両者の間に可逆的な関係が成り立つからである。

そして ぼくはぼくの鏡のなかに降りる

死者がその開かれた墓に降りていくように¹³⁾

詩人の視線は鏡面を通過するとき、「鏡のなか」に他者を捉える。「鏡のなか」とは主体と鏡面を隔てる空間のことではない。ひとまず想像力によって見られる、こちら側にある現実の空間とまるで対称であるかのように近似する空間といえるだろう。しかし人は鏡面を越えて「鏡のなか」へ入ることはできない。したがってそこから文学的な想像力をとおして鏡の魅惑と恐怖が生れるのだ。

「鏡のなか」に入りこむ恐怖をモチーフとして戯曲を書いた作家に清水邦夫がいる。『火のようにさみしい姉がいて』(1978年)の第三場で、理髪店を訪れた男とその妻は、まるで「鏡のなか」にあるかのような故郷の村人たちに出会う。「バスは三年前にやめになった¹⁴⁾」と〈べにや〉により語られた(=騙られた)とき、男と妻が脱出の手段を奪われたために、現実の世界から遮られた冥界に通じる場としての理髪店は、ユングをもちだせば、「無意識の精神が、ときには現実の

意識的な洞察よりすぐれた知性と合目的性を表すことができる¹⁵⁾」世界である。なぜならそこが男が第一場の鏡のなかに幻として見た理髪店との微妙な同一性を保つ故郷だからである。ぐるぐるまわる三色の看板、客の顔を剃る女主人、皮砥で剃刀を研ぎながら歌う見習の若い娘。この風景が鏡のなかに BARBER「中ノ郷」のイメージとして現れる。くり返される「姉」の挑発により、男はシーちゃんと呼ばれた弟である自己の存在と、弟として演技する自己の役割とが限りなく重なり合うのを意識する。つまり、他人であるはずの女と自己との間にある「姉」「弟」という選択的であるべき恣意的関係が、演技をとおして姉と弟の必然的な先天的関係に転化するのを拒絶できなくなったために恐怖に陥る。

冥界に落ちることの恐怖、それは疑似故郷に入りこんだために、姉弟の関係に陥ることの恐怖なのだ。しかしこの戯曲では、男が自分の意思により姉弟の関係を作るのではなく、逆に「中ノ郷」の女が男を挑発して、その関係を強要するのだ。主人公にとって、自分が鏡のなかに落ちるのではなく、イメージが境界を跳び越えて現実の空間に侵入してくることが恐怖なのだ。この双方向性をもつ恐怖がグリーンのだアの両義性にある。十三歳のとき、セント・ジョン寮に入るまでは、スクール・ハウスの生活は少なくとも孤独ではなく、仲間意識と愛情を感じさせるものだった。アランにたいし、グリーンは、「幸福な状態だ。少年時代は十三歳まではきわめて平穏だった。家庭から寮に送り出されるまでは¹⁶⁾」と言う。

清水が鏡を隔てた両世界について限らない同一性を強調するのにたいし、グリーンは逆に第一作の『内なる人』以来、国境を挟む両者の間にある異質性を追求してきた。『掟なき道』のだアの文章は、表層的にはもちろんグリーンが国境の向うにこちら側との差異を感じて、不安に陥ることを示している。しかし現実生活の中でグリーンがそれを具体的に意識したのは、十三歳のときにジュニア・スクールに入ってからのことである。それ以前のグリーンにとっては逆に、同一性への恐怖、つまり「紛らわしいほどよく似た」異国から国境を越えて侵入してくるさまざまなイメージにたいする恐怖感が不安の実体だったのだ。グリー

ンは鳥やコウモリにたいする恐怖感を母から受け継いだため、大人になっても羽毛の感触が嫌いで、コウモリが恐怖の対象だった。また寝る時間になると、火災にたいする恐怖と家族から見棄てられるという孤独感から、グリーンはテディ・ベアを床に放り出し、乳母に拾ってくれと叫び、乳母がやってくると、安心して眠ることができた。このようにスクール・ハウスの中で体験された日常の時間は、『掟なき道』の「プロローグ」の中で、書かれたグリーンの意識をとおして虚構化され、さらに小説作品群の中ではグリーン的な認識と感性を仮託された登場人物たちの意識と無意識をとおして虚構化されていくのである。

(1998. 1. 7 受理)

注

- 1) Graham Greene, *A Sort of life* (London: Bodley Head, 1971), p.12.
- 2) Graham Greene, *The Lawless Roads* (1939; London: Bodley Head, 1978), pp.1-2.
- 3) Greene, *A Sort of Life*, pp.60-61.
- 4) Michael Tracey, *A Variety of Lives* (London: Bodley Head, 1983), pp.8-9.
- 5) Norman Sherry, *The Life of Graham Greene: Volume One 1904-1939* (London: Jonathan Cape, 1989), p.34.
- 6) 1993年10月23日付のジョン・デイヴィスン氏から筆者宛ての書簡。
- 7) 1993年10月2日付のジョン・デイヴィスン氏から筆者宛ての書簡。
- 8) 同上の書簡。
- 9) Norman Sherry, *The Life of Graham Greene*, pp.33-34.
- 10) Greene, *A Sort of Life*, p.72.
- 11) Marie-Françoise Allan, ed., *The Other Man—Conversations With Graham Greene* (London: Bodley Head, 1983), p.34.
- 12) Graham Greene, *The Human Factor* (1978; London: Bodley Head, 1982), p.220.
- 13) 宮川淳『鏡・空間・イメージ』(水声社、1991年)9ページ。
- 14) 清水邦夫『火のようにさみしい姉がいて』(『清水邦夫全仕事 1958~1980 下』河出書房新社、1992年)246ページ。

- 15) Carl G. Jung, *Psychology and Religion* (New Haven and London: Yale University Press, 1938), p.45.
- 16) Allan, *The Other Man*, p.30.